

大豆の放射性物質吸収抑制対策を

徹底 しましょう！

平成28年5月

- 県内の平成27年産大豆について放射性セシウム検査を実施した結果、検査した188点全てが基準値（100Bq/kg）未満でした。
- 実需者や消費者が求める安全な大豆生産のためにも、放射性セシウムの吸収抑制効果が期待できる以下の対策をしっかりと行いましょう。

1 土壌中のカリ含量を意識した土づくりをしましょう！

- ◆ 土壌中のカリが不足していると、大豆がセシウムを吸収しやすくなります。そこで、カリを含む資材（堆肥や稲わら等）による土づくりや、積極的なカリ肥料の施用に努めましょう。
- ◆ 大豆は5葉期から子実肥大盛期にかけて、セシウムを盛んに吸収します。そこで、生育初期にカリを効かせるよう、即効性のカリ肥料（硫酸カリや塩化カリ）を、基肥として施用しましょう（ケイ酸カリなど、遅効性の肥料は避けましょう）。
- ◆ 土壌中のカリ含量が25mg/100g（作土層を10cmとした場合、25kg/10aに相当）程度となるよう、カリ肥料を施用しましょう。

肥料散布量の目安

カリ含量が低いほ場

<土壌中のカリ含量を10mg/100gと想定>

- 堆肥や稲わらの施用をしていない
- 長年、耕作していない
- 砂質土壌など保肥力が弱いほ場 など

10aあたり散布量（現物量）

塩化カリ：20～30kg
または
硫酸カリ：24～36kg

通常の大豆作後の水田

<土壌中のカリ含量を15mg/100gと想定>

10aあたり散布量（現物量）

塩化カリ：15～20kg
または
硫酸カリ：18～24kg

※ただし、過去に大豆から高い濃度の放射性セシウムが検出されたなど、土壌中の放射性セシウム濃度が高いと考えられる地域では、土壌中のカリ含量が50mg/100g程度となるよう、カリ肥料を施用しましょう。

※保肥力が弱い土壌では、生育初期でカリ肥料が溶脱する場合がありますため、上記の目標値以上のカリを施用するなど、特に対策を徹底しましょう。

2 土壌の放射性セシウム濃度が高い地域では、窒素追肥を控えましょう！

- ◆土壌中のカリ含量が低い状況で、開花期に窒素追肥を行うと、大豆の放射性セシウム濃度が上昇します。そこで、土壌の放射性セシウム濃度が高い地域では、土壌中のカリ含量の確保を基本としつつ、窒素追肥を控えましょう。

3 適切な作土深を確保しましょう！

- ◆耕うんが浅いと土壌表層に放射性セシウムが溜まり、大豆の根もこの層に集中するため、大豆が放射性セシウムを吸収する危険性が高まります。深耕により放射性セシウムを土壌中に分散させるとともに、大豆の根が深く張るよう、耕深15~20cm以上を目標に、十分な作土層を確保しましょう。

4 土壌の付着防止を徹底しましょう！

- ◆適正な栽培管理（施肥、播種、培土など）により倒伏を防止して、放射性セシウムを含む土壌の付着による汚染を防止しましょう。
- ◆コンバインによる収穫の際は、刈高を10cm以上に設定し、土を巻き込まないように注意しましょう。

○この資料に関するお問い合わせ
宮城県農林水産部
農産園芸環境課 農産食糧班
TEL：022-211-2841